

あつた。言語障害としての発音の不明瞭も、このような生育歴に原因があるのではないかと思われる。

次に、観察及び指導として、K児が問題を持つ子どもとして取り上げられてから回復して卒園するまでの期間を三つに分け、第一期（入園後二週間目から七月末まで）を問題期、第二期（九月から冬休みまで）を転換期、第三期（一月から卒園まで）を回復期とした。

第一期に京都ビネー個別知能検査を行なった結果は、M・A五才でI・Q 82、言語面が特に劣り、テスト中における行動は全く自信が無く、励ますとやつと答えるような状態でその結果も非常にムラのあるものであった。一方母親の状態は、参觀日等にも集団生活に入れないK児を見て教師を責め、家で種々の作品を作らせては幼稚園へ持つて来させていた。他人に対し兄と比較して劣り問題視されているのをいやがり見栄を張った結果のように思われる。この頃同時に行なつた親子関係診断テスト（両親用）の結果では、父親は盲従型・期待型が危険範囲にあり、母親においては積極的拒否型、厳格型を除く他は全て危険範囲にあり、本人に対して非常に悪い状態にあつた。第二期に運動会を控え、保育終了後一人残して遊戯を練習させると非常によく憶え、次に五人の友達の中に入れさせ、それから全体の中に入れてさせると元気にするようになつた。ここで自信がつけば、自分で納得できると皆と一緒に行動が出来る事が分つた。子ども会には自主的に遊戯に参加し、第三期の造形展に

も種々の作品が出された。K児が皆と一緒に出来る事が分りだすと初めに女の友達が二・三人第三期に男の友達がひとり出来、どの教師にも話しが出来るようになつた。卒園前に行なつた同じ知能検査の結果はI・Q 99と正常範囲を示し、また、親子関係診断テストにおいても両親共不安型を除く他は殆んど安全範囲となつた。

結果として、逃避傾向にある子どもとして見られたK児も、そこには病身であった生育歴と、見栄を張った母親の為に入園当初から段々によくなるよりも状態が悪くなつていたが、教師の自信を与えてやることによつてそれも徐々に回復するのと併行して、母親の方も次第に見栄を張つた結果のようになり、両親と子どもを一度に治療する事になつたが、ここで一層はつきりすることは、子どもの問題は親にあり、特に母親にあると言うこと。即ち、K児のような子どもの場合は、個別保育と同時に親、特に母親教育の必要性を強く感じた。

（大会発表論文抄録60—61頁）

### いわゆる問題児とその周辺

西南学院大学 高橋さやか

（大会発表論文抄録38—40頁）

## VIII 保育効果に関する研究

××××

# 幼稚園児と保育園児

(保育にみられる差)

日本女子大学 児玉省

平野ひかる

**目標と方法** 幼稚園と保育園の教育はどんなに違うかを保育の現場において、子どもの行動を教師の反応において見出そうとしたものである。

東京都内の住宅地域から幼稚園保育園各二か所、下町地域からそれぞれ一か所を選び、心身ともに健康な一般普通児で、三十四年度入園児を各施設から一名ずつ計六名、三十三年度入園児を各施設から二名ずつ計十二名。なお幼稚園児と保育園児は、性別、出産順位、家庭環境において類似したもの、かつ年齢のひらきが六か月以内までのものを対象として合計九組計十八名の子どもを選び、各対象児を一回三十分ずつ合計十回にわたりて保育中の行動を観察記録し、その行動を対人関係における接觸と、遊戯状態の分析を試みた。また園児の家庭に子どもの発達についての保育学会基準によるアンケートを配布してその回答を求めた。

**対人関係** 保育中みられた子どもと教師、子どもと友達との関係を、模倣、同意、提案、質問等三十四の角度から分析し、各々の角度の行動について両施設の子どものどちらがそれらの行動をより多く示したか？を比較した。

**結論** (1) 幼稚園児は参加、協力など積極的行動が多いのに反し、保育園児は承認、受容などの受身的行動が多い。(2) 幼稚園児の方に

活発で指導的行動が多く、同時に(3)模倣的な傾向も強く、(4)先生に対するより多く自己主張する。(5)拒否、制限、無視、攻撃などの行動は保育園児に多く依存心も強い。(6)保育園児は誰とでも遊びが幼稚園児は限られた子どもと遊びやすい。

遊戯における差。遊戯を十三種類に分類してその各个方面についてその差を見ると、(1)幼稚園児の方が身体活動を中心とする遊戯、特にかけっこ、鬼ごっこ等活発な遊戯が多い。(2)ごっこ遊びが非常に少なく、知的遊戯が多いが、保育園児は、ごっこ遊びや積木等が多い。遊戯の種類は幼稚園児の方が多くかつ変化がはげしい。幼稚園児の方が社会性的遊戯や組織形態の遊戯が多い。

アンケートによる比較。(1)知的発達の面においては、幼稚園児の方がすべての面においてすぐれている。(2)社会的発達では、幼稚園児は、監督の有無にかかわらず決められたことをよく守るが、保育園児は、監督下においては、決められたことを守り、また、自分を相手に認めてもらいたがる傾向が出ている。(3)運動的発達では、幼稚園児は、手先が器用、保育園児は、生活の自立面、自分のことについては自分でする態度が養われていることが示されている。

(大会発表論文抄録12-14頁)